



—— 特集 ——
 「日本遺産認定」 那須野が原開拓浪漫譚 第二弾
那須野が原の夜明け

開拓の中核となった華族農場。次第に拓けていく那須野が原。それに先立ち、開拓の扉を開けた先駆者たちがいる。この地に夜明けをもたらした彼らの活躍を紹介する。

現在の取入口(左)と旧取入口(右) (西岩崎)

広 大な関東平野と那須連峰の間に横たわる那須野が原。国内

で最も広い扇状地だ。今では広大な農地や工業用地、そして多くの住宅地がそこかしこに形成され、関東地方と東北地方を結ぶ重要な地となっている。しかし、この地が現在のよう

に発展し始めたのは、ほんの140年前からに過ぎない。地質上、すぐに水が地中に浸透してしまう那須野が原。人々の多くは浸透した水が再び湧き出す那須野が原の扇端に集落を作って生活し、農地に適さない那須野が原の中央部には広大な原野が広がっていた。

那須野が原に大きな転機が訪れた明治時代。農業や工業などあらゆる分野で近代化を目指した殖産興業政策で、首都東京に近く、1万ヘクタールもの未開拓の原野が存在する那須野が原が、政府高官の目に止まらぬ訳がなかった。かくして明治華族たちの農場が数多く開かれ、那須野が原に開拓の鍬が入れられていく。これに先たち、明治9年には初代栃木県令の鍋島幹なべしまきにより、大運河構想が発案されるが、陸上輸送の要となる道路や鉄道が整備されつつあり、運河の構想は夢のままとなる。

しかし、那須野が原の開拓に「水」は欠かせない。大運河構想が立ち消えとなった後、明治18年、農地に水

を供給するために開削されたのが「那須疏水」。今日でもかんがい用水として、那須野が原の隅々に豊かな水を送り届けている。

そんな那須野が原に水の恵みをもたらしたのは周知のとおり。この「水の問題が解決された」という触れ込みが全国に知れ渡り、各地から入植のために移住する人々が劇的に増えました。那須疏水の開削が、那須野が原開拓のイメージアップを大きくもたらしたのです。

那須疏水がもたらした水の恵みは絶大——

那須野が原は、元々「那須野」と呼ばれていて、那珂川・蛇尾川・熊川・箒川が作り出したそれぞれの扇状地が合わさった日本最大級の複合扇状地です。川の上流域の扇頂部や扇中部では水が浸透するため、農地には適さず、長らく馬の餌や屋根にふく草を刈り取る場としてしか利用されていませんでした。那須疏水が



元市文化財保護審議会会長
磯忍いそしのぶ氏